

子規の妹・律

「同情ノ無キ木石ノ如キ女也」

森

巖

えひめの
媛たち



正岡家にある律の肖像写真 正岡律・古稀記念（昭和14年）

律が母八重と松山を出たのは明治二十五年の秋である。遠ざかる三津浜を見詰めながら、どんな思いを馳せていたのだろうか。迎えに来る兄と三人、親子水入らずの京見物への期待か、それとも故郷を離れる感慨か。いずれにせよこの先に、七年に渡る過酷な運命が待ち受けていた。七歳と、二十二歳の律には思いも及ばぬことだった。

正岡律は子規より三つ年下に生まれた。生涯二人きりの兄妹である。夫隼太亡き後の八重は二人を女手一つで育て上げ、子規をノボさん、律をリーさんと終生呼んだ。

兄が上京して二年後の明治十八年、十五歳で律は結婚した。相手は従兄で陸軍将校の恒吉忠道である。しかし、結婚生活は上手いかなかった。

二年後に離婚、理由はよく分からない。それから二年過ぎて再婚、今度は松山中学の地理の教師、中堀貞五郎に嫁いたが、これも一年足らずで復籍している。こちらには理由らしい話が残っている。明治二十二年、再略血した子規が養生のため帰省したとき「兄の看病で一日おきに帰らせて頂きます」と言っ、その通り実行したのが離婚の元だという。それが本当だと、律は自分の夫よりも兄の方が大事な人であったことになる。

「律ハ強情也 人間に向ッテ冷淡也 特ニ男ニ向ッテshy也 彼（律のこと）ハ到底配偶者トシテ世ニ立ツ能ハザルナリ シカモ其ガ原因トナリテ彼ハ終ニ兄ノ看病人トナリ了レリ（後略）」明治三十四年九月二十一日。死の前年、子規が密かに綴った日記「仰臥漫録」には離婚の原因は律の性格にあると述べている。翌日も「彼ハ癪癪持ナリ 強情ナリ 氣ガ利カヌナリ 人ニ物間フコトガ嫌ヒナリ 指サキノ仕事ハ極メテ不器用ナリ（後略）」と、悪態を並べ立てている。果して彼女はそんな人物だったのだろうか。

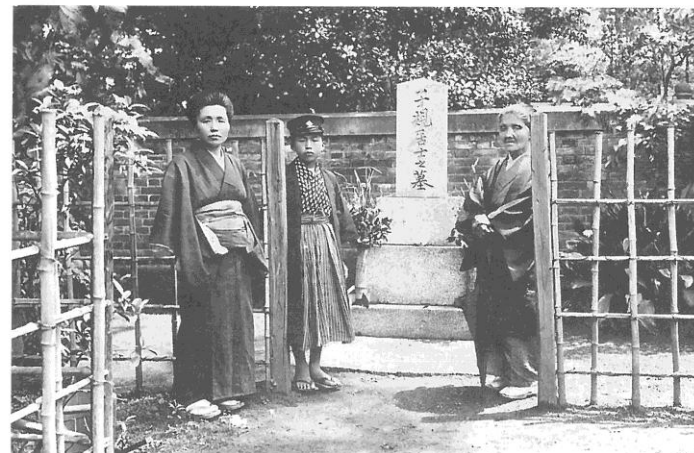
この頃の子規は、病勢が悪化し、二年後に離婚、理由はよく分からない。それから二年過ぎて再婚、今度は松山中学の地理の教師、中堀貞五郎に嫁いたが、これも一年足らずで復籍している。こちらには理由らしい話が残っている。明治二十二年、再略血した子規が養生のため帰省したとき「兄の看病で一日おきに帰らせて頂きます」と言っ、その通り実行したのが離婚の元だという。それが本当だと、律は自分の夫よりも兄の方が大事な人であったことになる。

「律ハ強情也 人間に向ッテ冷淡也 特ニ男ニ向ッテshy也 彼（律のこと）ハ到底配偶者トシテ世ニ立ツ能ハザルナリ シカモ其ガ原因トナリテ彼ハ終ニ兄ノ看病人トナリ了レリ（後略）」明治三十四年九月二十一日。死の前年、子規が密かに綴った日記「仰臥漫録」には離婚の原因は律の性格にあると述べている。翌日も「彼ハ癪癪持ナリ 強情ナリ 氣ガ利カヌナリ 人ニ物間フコトガ嫌ヒナリ 指サキノ仕事ハ極メテ不器用ナリ（後略）」と、悪態を並べ立てている。果して彼女はそんな人物だったのだろうか。

神的鬱積の爆発に対し、律は平然と冷徹さを装っていたのかもしれない。そうでなければ、あの地獄の釜のような傷口と対峙することはとても出来るものではない。

明治三十五年五月五日、子規は新聞「日本」(陸羯南創刊)に随筆「病牀六尺」の連載を始め、一日何回も麻痺剤を飲みながら菓物帖、草花帖、玩具帖に写生の絵を描いた。それは恐ろしいほどの気力だった。「病牀六尺」は死の二日前まで続き、律は子規の反古一枚も疎かにしなかった。それらは律にとって掛け替えのない宝物であった。

九月十九日午前一時、子規の臨終は実に静かだった。隣の部屋で仮眠中の律は母の声で気付き、医者呼ぶため裸足で飛び出した。律は今際のきわの兄に付き添えなかつたことを恨み、さめざめと泣いた。



子規墓前(大龍寺)で養子縁組記念写真 大正3年 中央、忠三郎(12歳)右、八重(69歳)左、律(44歳)

「わが家にある肖像写真を見る限り、律女は気の強そうなおばさんといった印象で、女らしいとか器量の良い人には見えない」と、正岡浩氏は語っている。浩氏は律の養子忠三郎(叔父加藤拓三男)の長男で戸籍上の孫である。確かに、忠三郎を養子に迎えて、記念に母と三人で子規の墓に詣でて写した写真の律は頬骨が張り、口元からも男勝りの気質が窺える。尤も、この年は子規の十三回忌に当たり、律はとうに裁縫教師として一家の台所を支えていた。

裁縫教師への道は子規没年の翌年からで、現在の共立女子大学の前身、共立女子職業学校へ入学して始まった。三十三歳での就学はいかに気丈とはいえ、並々ならぬ覚悟がいったに違いない。律は本科二年、補修科一年を修め、卒業と同時に採用された。大学の同窓会誌「桜の友」の犬丸秀雄教授「律女覚書」(昭和四十九年六月二十三日寄稿)によれば、曲ったことが嫌いで融通がなく、非常に厳格な教師だったなど、律の後半生に詳しい教え子達の証言を伝聞している。どうやら律は裁縫教師を十数年間務め、大正十年に五十一歳で退職したらしい。退職後は陸家の娘



堀江サキ上京記念 昭和八年八月一六日 子規庵庭
前列左より堀江サキ、正岡律(船越五)、久米倫
後列左より船越ハナ、館四枝

や親しい家庭の子女に裁縫を教えたり、親しい教え子達を招き親交を重ねている。又、この頃の律は教師時代の厳しさは消え、穏やかで世話好きな人物として敬愛されていたようだ。

律の楽しみは何といつても芝居見物だった。子規門下の佐藤紅緑が本郷座の座付作者だった所為か、新派役者の村田正雄や伊志井寛を眞に、歌舞伎では初代中村吉右衛門の舞台に目が無かった。珍しく播磨屋の蝙蝠安が懸ると言って、教え子二人を招待し、お富与三郎の「世話情浮名横櫓」(大正十一年新富座二月狂言)を観劇している。この時の二人、船越ハナ、橋本だけは最期まで律に付き添い、十三回忌の律の法要も世話役を務めている。

正岡忠三郎は東京一中、仙台二高の後京大を出て阪急百貨店に勤め、昭和十二年に野上あやと結婚、伊丹に新居を構えた。結局、律が忠三郎らと一つ屋根の下に住むことはなかった。母八重は既に十年前、享年八十三歳の夭折をまっとうしていた。嫁のあやから見た律は病的なまでに潔癖で几帳面な姑だった。水洗便所でも一日二回は掃除せずにおれぬ

程の奇麗好き。皮肉にもその性格が命取りになった。早くから断髪した律は月に二度、必ず床屋に足を運んだ。その床屋で丹毒に感染し、東大病院小石川分院へ入院。教え子達は律を慕い、面会謝絶にもめげず病室に押しかけた。律もそれが嬉しかった。丹毒のあと心臓を患い、昭和十六年五月二十四日不帰の人になる。享年七十一歳だった。

正岡律は半生を兄の看病に捧げ、後半生を職業婦人として生きた。「指サキノ仕事ハ極メテ不器用ナリ」と子規が心配したその指先一つで、忠三郎を立派に教育し、女中と二人でゆとりのある晩年を子規庵で全うしたのである。

教え子に囲まれた律六十三歳の写真がある。その満ち足りた笑顔は生き生きとして、美しい。

もり、いわお 一九三五年生まれ。本籍長崎市。松山東高校、松山商科大学卒。元南海放送(株)取締役報道制作本部長。一九七八年、子規と律を描く南海放送制作のTVドラマ「わが兄はホトギス」(脚本早坂暁)を演出。文化庁芸術祭優秀賞など受賞。現在、社会福祉法人愛媛慈恵会監事。松山市社会教育委員、愛媛民俗学会員。